

Round III

映画文学人生論

山本周五郎 (1903-67)

『おごそかな渴き』(1967) 「朝日新聞」

『青べか物語』(1960 「文藝春秋」

『青べか日記』 『愛妻日記』 『戦中日記』

参考：『論語』

七十五にして心に欲するところに従えども、矩(のり)を踰(こ)えず

私も満七十五歳の後期高齢者になった。聖人孔子にならって、心に欲するところに従えども、矩(のり)を踰(こ)えず、という心がけでいきたい。

心に欲するところとは、まず呼吸である。息を吸って吐く——これは意識せずにやっているが、やはり心に欲するところだと思う。欲するところがなくなれば呼吸は自然にとまるだろう。

次に睡眠。午後十時には自然に眠くなる。夜中に目が覚めて、眠れない夜かなと思っていると、いつのまにかまた眠っており、起床は午前六時。

次に食欲。食事は一汁一菜を目安にする。目の前にごちそうがならぶと、たちまち矩を踰えてしまいが、たまにはいいか。

食欲があれば、排泄欲もある。頻尿の傾向があり、前立腺肥大か、あるいは癌かもしれない。

性欲、権力欲、物質欲などは幸いにして薄れており、おそらく矩を踰えることはないと思う。読書欲と運動欲は心に欲するところに従って、ペーstadownをはかりながら可能な限り持続したい。

毎日、朝食の後は散歩に出かける。これは五歩が目安。一万歩でも歩けるし、ジョギングだつてその気になればできるが、矩を踰えず。

散歩のコースはいくつかあるが、蒸気河岸の先生にならって、根戸川沿いに歩く。東京湾に注ぐ河口までの往復で、所要時間は約五十分。

この河口は、蒸気河岸の先生のいう河口ではな



Round III ——— 映画文学人生論

い。当時は沖の百万石と呼ばれる海だったが、その後、浅瀬が埋め立てられて、河口はその分だけ海側に移動した。

私の住居の所在地ももとは沖の百万石と呼ばれる海の中だったが、今は埋立地で、いっぴしの陸地だ。

根戸川沿いに歩くと、河川に架かる三つの大きな橋の横を通り過ぎる。河口では魚を釣っている老人がいる。「釣らないですか」と、誘われるが、「竿がありませんから」と答え、「ここではよく釣れるのですか」と、逆に聞き返す。「今日はどうかな。潮がないね」と老人はいう。

「人はなんによって生くるか」などという哲学的な問いかけはしない。するはずがない。あれは蒸気河岸の先生と先生の影との自問自答だ。

昭和四十二年(1967)二月十四日、蒸気河岸の先生は医師が強心剤を注射しようとするのを断り、「山へ」と夫人に言っつて、死んだ。享年六十三。

先生が「現代の聖書」として執筆しはじめた小説『おごそかな渴き』は未完。

私の「映画文学論」は第二ラウンドが終了したが、これで完結したことにはならない。第三ラウンドは週一回掲載から月一回掲載へとスローダウンする。一応、十年計画だが、未完でもよい。矩を躰えないようにしよう。

焼けてくる岩魚に塩を振りかけて